

名古屋造形大学 シラバス作成の要領

(2020 年度用)

名古屋造形大学 事務部

1. シラバスとは

(1) 教員にとっては

- ①シラバスは、教員が、体系的な教育課程を踏まえ、学習者の視点を考慮して、授業設計をするためのものです。教員は、シラバスを作成することで、その授業で、学生の学士力向上のために、何を、どこまで、どの程度、どのように教えるのかを明確にできます。
- ②シラバスは、授業設計の観点からは、PDCAのP(計画)に相当します。その後、実際にシラバスにそって運用され(D)、適切に評価され(C)、評価に基づいて年々更新・改善される(A)ものです。このように、シラバスを実際に活用してみて、学生の学習意欲と学力向上の状況を確認しながら、だんだんと質を高めていく姿勢が大切です。
- ③シラバスは、教員と学習者との「約束」であり、教員は授業に責任を持ちます。

(2) 学生にとっては

- ①シラバスは、学生がその授業について知り、理解をするためのものです。学生は、シラバスを見て、自分が何のために何をどのように学び、何ができるようになるのかを明確化し、具体的にイメージすることができます。
- ②学生は、シラバスにより、その授業を履修するかどうかを判断します。
- ③学生は、シラバスにより、学習意欲が高まり、授業へ主体的に参加するようになります。
- ④学生は、シラバスにより、教科書・参考書・参考資料等や授業時間外学修(予習・復習等)を事前に知り、学習の準備を行います。

(3) 記入がない／適正に記載されていない／「授業中に配布」と記載されていると…

シラバスは、必ず適正に記入・記載するようにお願いします。

- ①記入がないと、学生が履修登録できなくなります。

②学生が、資格取得に際して、シラバスの提出を求められることがあります。シラバスの記載がない場合や不適切な記載である場合、学生が困ることになります。

③大学設置基準第 25 条の二注 1)を満たしていないシラバスが一科目でもある場合は、文部科学省並びに私学共済事業団への各種申請に際して齟齬を生じます。また、私立大学経常費補助金が大幅に減額されます。シラバスが文部科学省の事業への申請要件となっている場合は、申請ができなくなります。逆に、全授業科目のシラバスが要件を満たしていることによって、教育研究環境がより充実し、大学運営がより安定します。

④シラバスに関する認証評価の評価基準注 2)を満たしていない場合は、認証評価の際に、「改善」を求められ、場合によっては「不適合」「不認定」と評価されます。

⑤全授業科目について、授業形態、授業の到達目標、授業の概要、授業の方法、授業時間外の学習、評価の方法・基準、授業計画を必ず適正に記載をお願い致します。また、記載後は、学生の立場になってもう一度ご確認いただきますようお願い致します。

2. シラバスの項目一覧 **※赤字の項目が入力必須です**

①授業科目名

②授業形態

③開講期間

④単位

⑤担当教員名

⑥授業のテーマ

⑦授業の達成目標

⑧授業科目の概要(200～250 字)

⑨授業時間外の学習

⑩成績評価の方法・基準

⑪履修上の注意事項

⑫授業計画

⑬教科書・参考資料等/テキスト

⑭課題に対するフィードバックの方法

⑮卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

3. 項目ごとの記載の仕方と留意点

(1)～(5)授業科目名、授業形態、開講期間、単位、担当教員名
記載済み。間違いがないか、ご確認ください。

(6)授業のテーマ

授業の全体のテーマについて記載します。

例:「テーマ:…の理論と実際」

(7)授業の達成目標

①授業終了時に、学生ができるようになってほしいことを 3～5 項目程度記載します。

②学生を主語にし、学習者側の行動(行為動詞)で具体的に示します。「…できる」「…することができる」「…できるようになる」等のように記載します。

③多くの学生が達成可能な現実的なレベルの目標を設定します。また、多くの学生が意欲的に取り組もうと思える目標を設定します。理想的な高い目標や簡単な低い目標にならないように留意します。

④どの程度まで到達できたのかを測定可能な形で設定します。なお、ルーブリック評価や試験は到達目標をもとに作成します。

⑤知識・理解(認知的領域)、技能(技術・スキル・運動能力等の技能表現的領域)、態度(意欲等の情意的領域)の3つの領域の観点から述べるのが望ましいです。

⑥目標は一文に一つずつ記載することが望ましいです。一文に複数の目標を記載すると、わかりにくく、達成も難しくなります。

⑦望ましくない例(教員が主語)

「説明する」「概説する」など。

⑧目的としてはいいが、到達目標(行動目標)としては抽象的な例

「知る」「理解する」「考察する」「修得する」「身につける」など。

⑨行動目標として望ましい例

1)知識・理解の観点…「説明できる」「述べる ことができる」「論じることができる」「指摘できる」「区別できる」「分類できる」「関連づけることができる」「予測できる」「仮説を立てる ことができる」「一般化できる」「応用できる」「適用できる」など。

2)技能の観点…「使用できる」「実施できる」「測定 できる」「操作できる」など。

3)態度の観点…「討議できる」「参加できる」「配慮できる」「協調できる」など。

(8)授業概要(内容)(200 字～250 字)

①授業概要は授業の要旨について必ず記載します。学習者側の視点で述べるのが望ましいですが(「学ぶ」など)、教員からの視点で述べてもかまいません(「概説する」など)。

例:「今日、〇〇が問題となっている。この授業では、△△について学ぶ。」

例:「この授業では、△△について理解し、□□の技法の基本を修得する。」

- ②授業概要は、わかりやすく、具体的に記載します。抽象的・専門的な用語はなるべく避 けます。
- ③授業概要は、200 字～250 字程度で記載することが望まれます。
- ④授業では、知識・理解、技能、態度についてバランスよく学ぶことが望まれます。

(9) 授業時間外の学習

- ①大学設置基準第 21 条注 7)では、1 単位の授業科目は 45 時間の学修を必要とする内容をもつて構成することが標準と定められています。したがって、授業時間外の必要な学修(予習・復習等)は、2 時間(実時間では 1 コマ 90 分)の授業について 4 時間(実時間では 2 コマ 180 分)、4 時間(実時間では 2 コマ 180 分)の授業について 2 時間(実時間では 1 コマ 90 分)を行うこととなります(6 時間(実時間では 3 コマ 270 分)の授業については授業時間のみ)。授業時間外の必要な学習は準備学習、事前・事後学修ともいいます。
- ②授業外学修に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容について必ず記載します注 10)。なお、授業計画に授業外学修の詳細を記載することができます。

例:「授業前には全文を英訳してくる事」

「毎授業後にはレポートを提出すること」

「〇〇に関するボランティア活動や行事等に参加すること」

「〇〇に関して課外活動等を通して観察や聞き取りを行うこと」

(10)評価の方法・基準(評価割合)

- ①成績評価は、学習者が授業の到達目標をどの程度達成したかを客観的に厳格に評価するものです注 9)。
- ②評価の配分割合を必ず記載します。
例:「定期試験 50%、課題・授業外レポート 30%、小テスト 10%、授業への参加態度 10%」
「授業への参加態度(50%)、達成度確認テスト(50%)」
他に、授業内レポート、コメントシート、授業態度、受講態度、クラスへの貢献度、プレゼンテーション、授業での制作発表、ポートフォリオ、演習・実技・実習など。なお、「定期試験」とは定期試験期間に行う試験のことをいいます。
- ③出席回数については、欠格条件(試験が受験できない条件、単位が取得できない条件)とすることができます。また、評価の減点要素にすることができます。なお、大学基準協会は、授業の出席は成績評価の前提であり、出席点は評価基準に含めるべきではないとの見解を示しています。
例:「欠席の場合は1回につき1点を減点する」

(11)履修上の注意事項

- ①履修にあたっての注意事項があれば、記載します。
- ②授業の性質上、受講者数の制限や受講の条件を設けている場合は、その旨を記載します。
例:「〇〇のため、定員は△△名とし、受講生が多い場合は□□によって選考する」
「〇〇学科△△コースのみ履修可能である」
- ③履修の際に必要とされる知識・学力等があれば、記載します。

例:「〇〇について、△△程度、学んでいることを前提とする」

「〇〇の履修を前提とする」

- ③欠格条件(試験が受験できない条件、単位が取得できない条件)等も記載します。

例:「2/3 以上の出席がない場合は、試験を受けることができない(欠格条件)」

「3/4 以上の出席がない場合は、単位を取得することができない(欠格条件)」

- ④遅刻・欠席等のルールがある場合は、記載します

例:「20 分以上の遅刻は欠席とみなします」

「遅刻 3 回で欠席 1 回とみなします」

(12) 授業計画(テーマと内容等)

- ①半期 15 回(外国語 I・II は半期 30 回)又は通年 30 回の週間授業(ゼミ・演習、卒業研究、実習、研究指導等を含む)・隔週授業・集中講義は、回ごとに必ず記載します。集中講義のうち、半期 15 回に分けられない授業は、大まかな流れをまとめて記載します。週間授業でない実習で「実習実施計画」等がある場合は、「実習実施計画による」のように記載します。なお、週間授業/集中講義/実習の区別はシラバス一覧で開講区分をご覧ください。

- ②順序よく計画を立て、回ごとに、テーマ(1行目)と内容(2行目以降)を必ず記載します。必要に応じて、内容の次に、授業方法や授業外学習を記載します。

例:「テーマ:生涯スポーツの実践」

内容:活発な学習活動(身体活動)によって、現在の自己の体力・健康の維持・増進を計る。そして、いろいろなスポーツ技術を身につけることにより、生涯を通じてスポーツを楽しむ態度を養う。また、健康についての理論を学ぶ。

- ③試験だけでは 1 回の授業として認められません。授業(まとめや総括など)をした上で学習到達度を確認するための試験を行うことや学習到達度を確認するための試験を実施した上で授業(到達度確認のための設問についての解説など)を行うことは認められます。その場合は、授業内容と到達度の確認を記載します。

例:「テーマ:総括と学習到達度の確認テスト 内容:1 回目～14 回目の授業についての総括を行い、授業の一部で学習到達度の 確認テストを実施する 」

- ④テーマは毎回の授業の違いがわかるように記載します。同じ記載の列記や一括記載は避けます。同じようなテーマを扱う場合は、その回ごとのキーワードを記載します。なお、卒業論文・卒業研究と実習については、大まか流れの記載でもよく、同じ記載の列記や一括記載も認められます。

- ⑤オムニバスの授業の場合は、担当教員を記載します。

例:「〇〇〇(担当:◇◇◇)」

- ⑥その回に特定の授業方法を用いて行う場合は、授業計画に記載します。

- ⑦その回に特定の授業外学習(予習・復習等)がある場合は、必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容について授業計画に記載します。

例:「授業前に全文を英訳してくる」

「授業後にレポートを提出すること」

- ⑧授業方法は、授業の進め方について必ず記載します。なお、授業計画に授業方法の詳細を記載す

ることができます。

例:「授業では、板書と ICT を活用する。また、□□の事例を紹介し、◇◇の DVD など も見る。」

例:「授業では、グループワークとグループ発表(全 3 回)、個人レポート提出(全 3 回)を行う。」

⑨授業では、板書、プレゼンテーションとハンドアウト(配布印刷物)、視聴覚メディアや e ラーニング注 5)、修学ポートフォリオ注 6)等を活用することが考えられます。

⑩授業では、学習意欲と学習の定着率を高めるアクティブラーニング注 8)を取り入れることが望まれます。例えば、グループ学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、ディスカッション、プレゼンテーション、理解度確認(小テスト、ミニレポート、クリッカー等)、レスポンスカードやコメントシート(授業についてのふり返り、思ったこと、疑問等)です。

(13) 教科書・参考資料等/テキスト

①テキストについて必ず記載します。なお、「授業中に指示する」という記載も可能です。

②テキストを用いる場合は、原則として、書名、著者、出版社、出版年、価格について記載します。なお、絶版等になっていないか、確認してください。

③テキストを使用しない場合は、空欄ではなく、「使用しない」又は「特になし」のように記載します。

④参考書・参考資料・参考 URL 等について必ず記載します。なお、「授業中に指示する」という記載も可能です。

⑤参考書は、その学問領域への興味関心を高めるもの、自ら学ぶのに役立つもの、さらに学びを深めるために有用なもの等を記載します。

⑥参考になる資料やホームページ等があれば、その情報(出典や URL 等)も記載します。

⑦参考資料を授業中に配布する場合は、「授業中に、適宜、資料を配布する」「必要に応じてプリントを配布する」のように記載します。

⑧参考書・参考資料・参考 URL 等の指定がない場合は、空欄ではなく、「特になし」のように記載します。

(14) 課題に対するフィードバックの方法

提出された課題の評価方法、フィードバックの方法を記載します。

例: 毎回の授業で前回の質問に対する回答プリントを配布します。

(15) 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

学科・研究科専攻等の教育目標や学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程の編成方針(カリキュラム・ポリシー)注 4)との関連からみた授業の目的を記載します。学習者が教育目標や学位授与の方針、教育課程の編成方針における授業の位置づけを認識し、卒業時や卒業後の将来ビジョンをもって意欲的に学ぶことができるように配慮します。

例:「○○(教育目標の一部)に関する知識、技法、態度を修得する」

4. シラバスの確認と訂正について

シラバスの入力後は、記載に不備がないかどうか、適正に記載してあるかどうか、シラバス入力期間中に必ず各自でご確認をお願い致します。

シラバス入力期間後、学務委員会教務部会を中心とした教職員及び事務部のもとで適正性の確認作業を行います。

もし不備や適正でない箇所があった場合は、事務部長、研究科長のもとで、訂正・修正等を行います。すべてのシラバスの適正性が必須となっていますので、ご了承のほど、お願い致します。

5. 問い合わせ先

シラバス作成の詳細について、ご不明の点は事務部にお問い合わせください。

【注】

1)大学設置基準(成績評価基準等の明示等)

第 25 条の二

大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。

2 大学は、学習の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

2)シラバスに関する認証評価の評価基準

【大学基準協会】

学生の学修意欲を促進させるために、適切な履修指導を行うとともに、適切なシラバスを作成し授業計画に基づいて教育研究指導を行い、授業形態、授業方法にも工夫を凝らすなど、学修の活性化のための十分な措置を講ずることが必要である。

【大学評価・学位授与機構】 5-2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。

5-2-3 適切なシラバスが作成され、活用されているか。【日本高等教育評価機構】

大学は、教育研究上の目的を達成するために、学部・研究科等の各教育組織において教育課程を編成し、学生にとって必要な学習量、教育評価の方法を定める必要があります。 3-1. 教育目的が教育課程や教育方法等に十分反映されていること。 3-2. 教育課程の編成方針に即して、体系的かつ適切に教育課程が設定されていること。

3)講義、演習、実験、実習、実技

大学設置基準第 21 条注 9)を踏まえ、次のように運用しています

授業形態	単位計算基準	単位数 (1 コマ=2 時間換算)
講義	15 時間の授業(30 時間の授業時間外学修)をもって 1 単位とすることを原則とする	2 単位 1 コマ×15 週
	30 時間の授業(15 時間の授業時間外学修)をもって 1 単位とする授業科目もある	1 単位 1 コマ×15 週
演習	30 時間の授業(15 時間の授業時間外学修)をもって 1 単位とする。外国語など。	1 単位 1 コマ×15 週
	15 時間の授業(30 時間の授業時間外学修)をもって 1 単位とする。	2 単位 1 コマ×15 週
実験 演習 実技	30 時間の授業(15 時間の授業時間外学修)をもって 1 単位とする。スポーツなど。	1 単位 1 コマ×15 週
	45 時間の授業(授業時間外学修なし)をもって 1 単位 とする。	1 単位 1.5 コマ×15 週
併用	別に定める(授業と授業時間外学修で 45 時間)	

4)教育目標、学位授与の方針、教育課程の編成方針

本学ホームページをご覧ください。

5)e ラーニング

コンピュータやインターネット等の IT 技術を活用して行う学習のことをいいます。コンピュータやネットワークさえあれば時間や場所を選ばずに学習でき、個々の学習者の能力に合わせて学習内容や進行状況を設定できる等の利点があります。(文部科学省の用語解説より) 反転授業(授業時間外で解説動画をみて予習し、大学では知識の確認、個別の指導、討議、問題解決学習、グループワーク、実習等を行う)においても用いられています。

6)修学ポートフォリオ

学修・活動経験を記録・蓄積し、自らの成長を確認します。また、就職活動やキャリア形成に活用します。

7)大学設置基準(単位)

第 21 条

各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一 講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。

三 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

8)授業時間外学修(予習・復習等)

本学の特色である実学・実践的学修を活用することもお勧めです。

9)成績評価

成績は到達目標を踏まえて評価します。また、知識・理解、技能、態度について、多面的に評価することが望まれます。

1)知識・理解…従来の筆記テスト(客観試験や論述試験)等

2)技能…実技テスト、実地試験、レポート課題等

3)態度…作文・論文・レポート・レスポンスカード・コメントシート・面談等

なお、筆記テストは、成績評価のみならず、学習者自身にとって、復習となり、理解度を確認し、さらなる学習への意欲となることが望まれます。

客観的で厳格な成績評価の工夫として、評価方法ごとの配分割合の明示、GPA の活用、ルーブリック評価(到達目標のレベルごとの学習者の行動を評価基準として提示した上での評価)やセミナー評価(グループワーク等における複数担当教員による評価)の活用等があります。